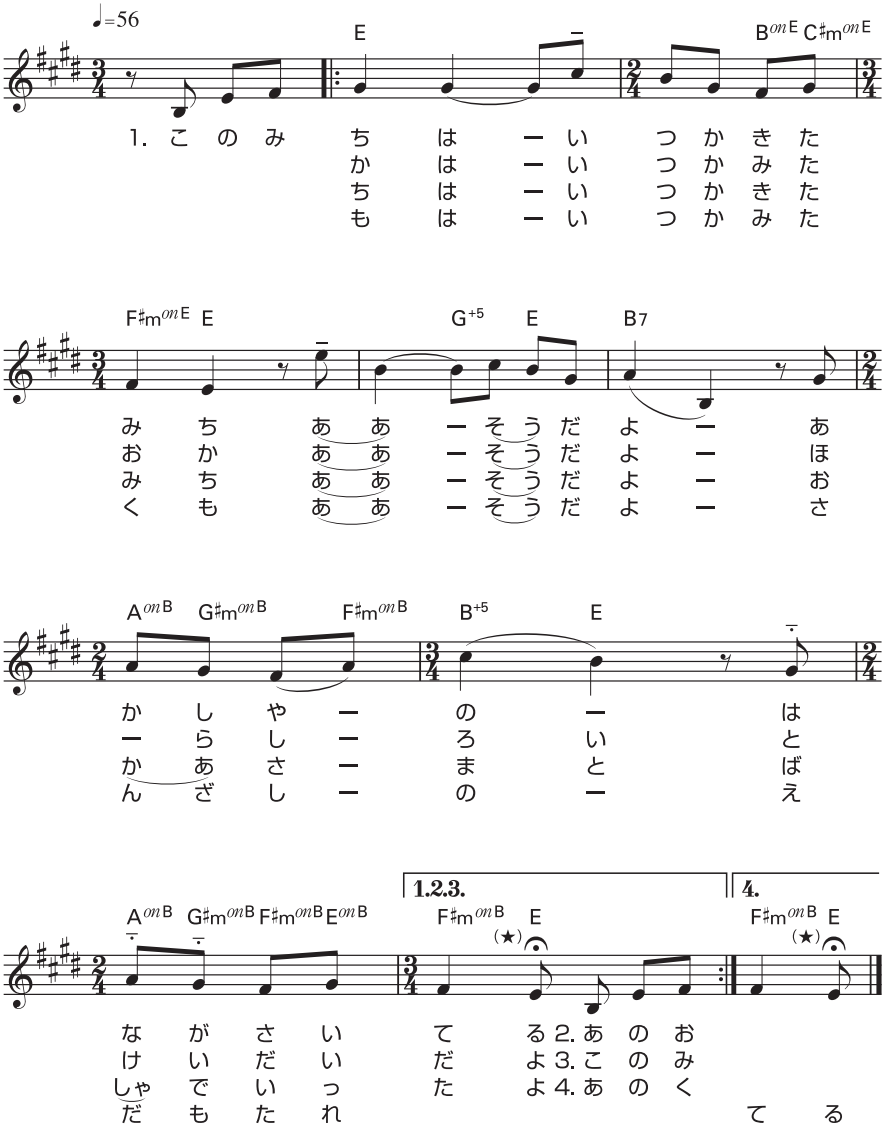
この道

作詞:北原白秋／作曲:山田耕筰

1926（大正15）年



一　この道は　いつか来た道
　ああ　そうだよ
　あかしやの花が咲いてる

二　あの丘は　いつか見た丘
　ああ　そうだよ
　ほら　白い時計台だよ

三　この道は　いつか来た道
　ああ　そうだよ
　お母さまと馬車で行ったよ

四　あの雲は　いつか見た雲
　ああ　そうだよ
　山査子（さんざし）の枝も垂（た）れてる

この曲では、歌詞で“思い出”を伝える風景などの描き方を解説いたします。場所や物には、それにまつわる“記憶”を伝える働きがあります。多くの童謡には場所や物や景色が描かれていますね。それらは歌詞の中で、**思い出のタイムカプセル**のような働きをするのです。

「この道」から思い出を描く歌詞のテクニックを学びましょう。

思い出のキーワードとは

この歌詞には、北原白秋先生が**1925年（大正14年）**に仲間と旅行した北海道の思い出が書かれています。しかし、そこにお母さんの思い出が重ねられていますから、お母さんの実家がある熊本県南関町と幼少から学生時代を過ごした福岡の柳川を結ぶ南筑後の思い出の道のイメージも透けて見えてきます。

歌詞は、日記ではないので、書き手も読み手もイマジネーションを膨らませてOKです。歌詞では場所は限定されていませんね。だから、聞き手の故郷や旅の思い出など、自由に想像できるようになっています。「この」という連体詞は重要な働きをしています。まさに今、主人公は、この道にいるのです。「この」は、現在まさに進行している歌ということを明示するのです。

●あかしやの花

３月から６月に咲く黄色い花です。「咲いている」と、やはり現在形で書かれています。今まさに、匂うように目の前に花が見えるのですね。一般的に、歌詞の中に花を登場させることでいろいろなメリットが生まれます。花の名前を出すだけで……色！ 香りのイメージ！ 咲いている情景（シーン）！ 花言葉！……などの情報をさりげなく聞き手に伝えることができます。

●丘～白い時計台

丘を登場させることで、一旦、聞き手の目線を遠くに飛ばすことができます（連体詞が“あの”になっていることに注目！）。そして、その風景のイメージの中に、白い時計台を描くのです。聞き手の頭には、自然に丘を背景にした白い時計台の映像が浮かぶはずですね。また、“白い～”としたことで、札幌の時計台であることを匂わせています。ここは、作者にとってのリアリティの部分です。もちろん、この“白い～”から、幼い頃の無垢さや純粋さを連想しても良いのです。

●馬車

お母さまと一緒に乗った馬車ですから、作者にとっての具体的な思い出ですね。母に対する愛を馬車に重ねる手法です。うまの蹄の音、車輪が軋む音、馬車が揺れる様子などが自然に浮かんできます。

●雲～山査子（さんざし）の枝

雲は常に形を変えて流れていきますね。でも、いつか見た雲としたことによって、雲さえも懐かしく思い出されるという主人公の気持ちを強調できるのです。また、青空の雲の下の方には、山査子の枝が垂れていますね。見上げる雲は上向きのベクトル（目線）、垂れる枝は下向きのベクトルです。シーンを上下に広角に切り取っていることがわかります。雄大な映像美、それが思い出の美しさに重なるのです。

この詞の「上向きの目線と下向きの目線」ような、相反する物を関連づけて表現する作詞の手法を**「対比」のテクニック**と呼びます。

思い出は、場所や物のチョイスとそれを見つめる目線も重要！

読み手の想像力を刺激するテクニック

三行詞で４コーラスの歌詞ですが、よく見ると、１番と３番が「この道」になっていますね。１番と２番でひとまとまり、３番と４番でひとまとまりと区切ることも可能です。目線の動きが、この道→あの丘、この道→あの雲……というように足元から遠く、足元から遠くと行き来しているように読めるのです。スケールの大きな歌詞ですね。

「ああそうだよ」の部分も要チェックですね。誰かが側にいて会話しているようにも読めます(P.98の話者についての解説も参考にしてください)。また、自問自答しているようにも読めます。神の言葉かも知れません。幼い頃の思い出に対して、空の上から肯定する声が聞こえる。また、一緒に馬車に乗った母の面影が心の中で返事をしたのかも知れません。これは、読む人それぞれのイマジネーションで解釈して良いのです。歌詞は、多くの部分を聞き手や読み手の想像力や読解力に委ねています。それが歌詞の魅力の根底にあるのですね。

思い出を描くことは“現在(いま)”を描くこと！

思い出を描いている歌詞はたくさんあります。生きてきた道程、我が人生、そのものが思い出の積み重ねです。誰にでも、歌詞にする思い出のネタは無限にあるはずです。思い出を描いた歌詞には、かならず作者からのメッセージが託されています。そして、多くの場合、そのメッセージは“現在”の想いを代弁しています。

「この道」には、自分の人生を振り返ろうというメッセージが描かれています。壮年期に訪れた北海道の景色(道)と生まれ故郷の景色(道)を重ねて描くことは、人生そのものを描くことです。この道(人生)を歩んできて良かったんだ！ そして母への感謝！……そんなメッセージが読み取れます。すると、「ああそうだよ」も人生肯定の言葉に聞こえてきますね。その肯定の「ああそうだよ」は、歌を聴くあるいは歌う一般の人にも、伝わるはずです。**思い出を描くことは“現在(いま)”を描くこと！** なのです。今があるから思い出を味わえる！ ここまで生きてきたから、頑張ってきたから、思い出の大切さが分かる！

思い出を描いた歌詞からは、作者の“現在(いま)”のメッセージを感じ取りたいですね。

思い出を描くことは“現在(いま)”を描くこと！

想いを語るメロディー

少し、メロディーを見てみましょう。まず、めまぐるしい変拍子が特徴ですね。「バックのリズムにのって歌うメロディー」と「歌詞を語るように歌うメロディー」では、曲の作り方が変わってきます。山田耕筰先生の手によるこのメロディーは、あきらかに後者です。歌詞を伝えるのに不要な間(＝拍)はカットして、一気に想いを語るようなメロディーです。3/4 のメロディーですが、2/4 の部分で間を 1 拍分カットしたと考えると分かりやすいですね。

逆に、メロディーの最後は、じっくりと余韻を楽しみたいとフェルマータ(𝄐)が付いていますね(★)。童謡から多大な影響を受けているビートルズ(とくにジョン・レノン)も、変拍子の名手ですが、実は、歌詞を活かすための変拍子であることが多いのです。

最後に、出だしのメロディーは、移動ドで読むと♪ソドレミ～です。数え切れない名曲の数々が、♪ソドレミで始まっています。まさにソドレミの法則！ P.39 にも解説があります。参考にしてくださいね。

思い出を描いたJポップとは？

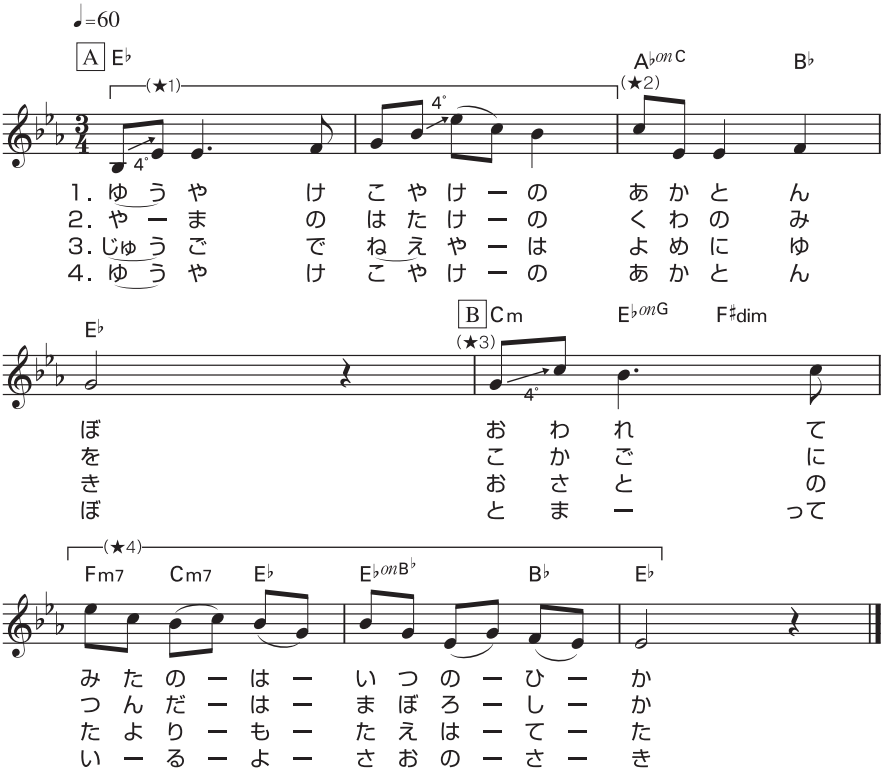
槇原敬之さん作詞作曲の「遠く遠く」は思い出を描いた傑作です。主人公は、故郷をはなれ都会に出て頑張っています。でも、都会で光り輝くまで帰らない覚悟です。まるで、時代は違いますが、北島三郎さん歌の「帰ろかな」(作詞：永六輔)と同じシチュエーションです。

歌詞には、思い出のワードとして、友の言葉を選んでいます。「元気かどうかしんぱいです」「いつでも帰ってくればいい」という故郷の友の言葉、それこそ故郷の思い出のキーワードです。そんな暖かい言葉をかけてくれる友がいる場所！ それが故郷なのです。そして、シチュエーションを明確にするために、新幹線のホームや同窓会の案内状といった、やはり思い出にまつわる言葉をチョイスしています。故郷を離れたことのある人、見送った思い出のある人……どちらにも伝わる歌詞ですね。思い出を描きながら、今の気持ちをリアルに表現する素晴らしい傑作です。

赤蜻蛉（あかとんぼ）

作詞：三木露風／作曲：山田耕筰

1927（昭和2）年



一　夕焼　小焼の　あかとんぼ
負われて見たのは　いつの日か

二　山の畑の　桑の実を
小籠に摘んだは　まぼろしか

三　十五で姐（ねえ）やは　嫁に行き
お里のたよりも　絶えはてた

四　夕やけ小やけの　赤とんぼ
とまっているよ　竿の先

「赤蜻蛉（あかとんぼ）」は、作詞の三木露風先生の幼少の頃、子守（姐や）の背中で見た赤蜻蛉の想い出を描いた歌です。詞が書かれたのは、1921年（大正10年）、曲が付けられたのは、1927年です。日本人なら誰でも共感を覚えるような情景を描いた歌詞に、哀愁感タップリのメロディー。日本の童謡を代表するような傑作であると言っても過言ではありません。

作詞の露風先生は、数えで７歳の頃、両親の離婚で祖父に引き取られ、そこで暮らします。ちなみに、祖父は龍野町（現在の兵庫県たつの市）の町長で銀行の頭取をしていたそうです。歌詞に登場する姐やとは、露風先生の子守の為に祖父の家で働いていた女性でした。彼女は10代の娘さんです。この歌詞には、母の思い出と姐やの想い出がオーバーラップしているのですね。その姐やも15才になると結婚で祖父の家を離れます。露風先生は幼少の頃に２度も大きな別れ（母と姐や）を経験していたのでした。

この歌詞には、**感動を深く伝える為に、さまざまな創作技法が駆使**されています。**“時間の流れ”や“目線の焦点（遠近法）”**など、さまざまなテクニックに支えられた芸術性の豊かな作品です。

作者の目線に注目

この歌詞を作者の目線というキーワードで読んでみましょう。作者は、何をどういう順番で見ているのでしょうか？

〔１番〕**夕焼けのまっ赤な空**に飛んでいる赤蜻蛉が描かれます。
〔２番〕**山の畑桑の実**とありますから、１番よりも近い場所が描かれていることが分かります。
〔３番〕姐やの想い出ですから**場所の要素はありません**ね。
〔４番〕ぐっと近くなって**手が届きそうな場所（竿の先）**を描いています。

まるで映画のカメラワークのように、夕焼け空から山のふもと……、そしてぐっとカメラが近づいて目の前に赤蜻蛉がいる！ その中に、姐やとの想い出がインサートされるのです。まさに**言葉による遠近法、作者の目線による遠近法**ですね。

このように作者の目線を映画撮影のカメラのように考えると、歌詞が非常に立体

的に書けますし、聞き手にとっては、リアルに感じられる歌詞となります。

話は、すこし変わりますが、漫画の世界にカメラの目線を採り入れたのは、手塚治虫先生でした。先生は、ディズニーのアニメーション映画から学んだズームイン＆アウトの手法や360度のパノラマ的な描き方をマンガの世界に大胆に採り入れました。

この赤蜻蛉の歌詞もズームインの書き方が素晴らしいです。この目線をカメラに見立てた描き方では、ズームインさせるほど、感動も比例して大きくなると言う効果があります。

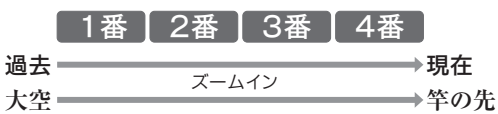
時間軸（時の流れ）

今度は、時間軸（時の流れ）で歌詞を見てみましょう。

〔１番〕「いつの日か」と作者自身、思い出せないほどの昔を歌っています。
〔２番〕「まぼろしか」とありますから、やはり幼い自分の記憶では、リアルか空想か定かでは無いのですね。遠い昔の想い出です。
〔３番〕具体的な想い出です。もう少し、大きくなってからの想い出でしょう。
〔４番〕一転、現在です。「とまっているよ」と現在形で書かれていますね。

１番から４番で、過去からだんだん現在にスライドしていたのです。場所のズームと同じく、時間軸をズームしてくるに従って、やはり感動も大きくなっていきます。

……まとめると、この歌詞は、目線というカメラがズームインしながら、時間軸の上で想い出も一緒にズームされているという複雑な構成であることが分かりました。



たった８行の歌詞の中に、複雑な仕組みが隠されていました。この仕組みは、作者の思いを、よりクリアに聞き手に伝える為の仕組みと言えます。そして、作者の感動をよりリアルに伝える為の仕組みであるとも言えるのです。

歌詞に１番、２番……がある理由

この歌を分析したときに、何故歌詞には１番２番……があるか？」という基本的なクエスチョンが浮かんできました。簡単に、その答えを列記してみます。

●起承転結などストーリーを描くため

P.113の起承転結の法則でも解説した、ストーリー展開の為の１番２番……。童謡では、「あわて床屋」「大きな古時計」がそのタイプですね。

●さまざまな意見やお話を列記するため

さまざまな考え方を列記したり、テーマに関係あるお話を紹介したりします。なぞなぞ歌の「あらどこだ」やキャンプの愛唱歌である「アルプス一万尺」や「キャンプ料理の歌」、著者が作った「そーっと・そっと」(P.264)などがそのタイプです。

●ＡとＢの対話や、疑問と答えを並べたりする

１番で誰かが質問したり、意見を言って、２番で誰かが答えたり、反論したりします。「かなりや」がそのタイプですね。１－３番で否定意見を述べ、４番が救いです。「シャボン玉」も同じく、１－２番で事実を述べ、３番(サビ)で祈ります。

●ひとまとまりの概念を個々に説明する歌

四季や朝昼夜を歌ったり、１から10の数え歌にしたりします。ずばり「四季の歌」や「おもいでのアルバム」、著作の作った「かけぶとん　しきぶとん」などが、数え歌では、「すうじの歌」や「いっぽんでもニンジン」があります。

●意外性の１番２番……

上記の解説で大半の歌の１番２番の意味合いが理解できますが、上記に分類できない意外な構成を“発明”することも作詞の醍醐味です。「やぎさんゆうびん」(P.137)は、１番と２番が無限にループするという意外性の１番２番でしたね。

1番2番という構成を活かして幅広い曲作りを！

言葉とメロディーの関係

作曲の山田耕筰先生は、日本語とメロディーの関係を大変に重視した作曲家として知られています。しかし、この曲でよく話題になるのが、「あかとんぼ」という言葉のアクセントの位置の問題です。言葉のアクセントとメロディーの関係は、ここまでにもいろいろな童謡で解説して来ましたが、まとめとして、ここで紹介します。

●日本語のアクセントは、「高低アクセント」

雨と飴を区別するのは、“あ”と“め”のどちらを音程的に高く発声するかで変わります。それが、「高低アクセント」と呼ばれる所以です。音程の問題ですから、メロディーとは非常に関係性が高いです！だから、メロディーの付け方によっては、たとえば、雨が飴に聞えてしまうのです。

●方言や時代による違い

関西アクセントと東京のアクセントが逆であることは、ご存じと思います。また、時代によって、アクセント位置が変わってきていることも、多くの方がお気づきと思います。一般的に、「**ギ**ター」「**モ**デル」は、「高低」というアクセントですね。しかし、最近のミュージシャンや若者の間では、平板式と言って「ギター」「モデル」と高低がない形で発音されています。時代によって、アクセントもドンドン変わっていくのですね。

●イントネーションとは

アクセントと混同されてしまう場合もありますが、イントネーションは、「話すときに文節の区切りや文末にあらわれる声の上がり下がり」(明鏡国語辞典)を意味します。たとえば、**疑問文は文末を上げて**喋りますよね！ 逆に、**断定の意味を強調するために、文末を下げ気味で喋ったり、文末の言葉をフォルテ(強く大きく)で喋ったり！**……。イントネーションも上げ下げや強弱の問題ですから、メロディーで上手く表現できます。

●あかとんぼの場合

楽譜の(★2)をご覧ください。この歌の場合、「**あ**かとんぼ」と、太字の「あ」が高いメロディーになっています。現代の我々には、耳馴染みの薄いアクセントです。

「あ**かと**んぼ」が、現代の我々のアクセントですね。

しかし、作品が発表された昭和２年！ その頃は「**あ**かとんぼ」が標準語の正しいアクセントだったそうです。このことは、海沼 實先生のお孫さんで、童謡研究家の海沼 実先生の著書にも詳しいです(『童謡 心に残る歌とその時代』NHK出版)。

つまり、このメロディーは、歌詞の発音(アクセント)に忠実なのですね。

メロディーと歌詞のアクセントやイントネーションの一致！

日本のメロディーの新しい夜明け

作曲の山田耕筰先生(明治19年生まれ)は、日本初の管弦楽団を作るなど日本のクラシック音楽や西洋音楽の普及に大きな功績を果たしました。そして、洋風なメロディーを活かしながらも日本の心を的確に表現する作曲で、「からたちの花」「この道」「ペチカ」「待ちぼうけ」「あわて床屋」など大傑作を残しています(以上の作詞はすべて北原白秋)。これ以外にも、交響曲やオペラ、校歌、市歌、軍歌などの作曲や編曲や、音楽の教科書や指導書の執筆など……枚挙にいとま無しの大活躍をされました。今、我々が自然に西洋音楽に馴染んでいる、その土台、礎(いしずえ)を作ってくれた恩人、それが山田先生なのですね。

さあ、メロディーを見てください。

(★1) モチーフ(動機)の２小節ですが、ここで最高音(♪ミ♭)と最低音(♪シ♭)が登場しています。なんとダイナミックなモチーフでしょう！「ゆうやけ　こやけの」という歌詞が描く映像美を２小節に凝縮したメロディーです。音域は、完全11度(オクターブと完全４度)です。たった２小節で11度を駆け上がるためには、跳躍のメロディーが必須です。

頭の「ゆう」で完全４度上行、「こやけ」の「やけ」でも完全４度の上行に注目しましょう。４度の上行は、「**強進行**」と言って力強く響くのが特徴です。実は、これって同じ♪シ♭から♪ミ♭の１オクターブ違いです。しかも、モチーフの始音と終音が(オクターブ違いの)シ♭音なのも見逃せません。

跳躍の連続メロディーでは、忙しい感じがしてしまう可能性もありますが、１小節目の「やけ」に使われている付点４分音符のゆったりしたリズムが、

跳躍の忙しさを感じさせず、前記のダイナミックさを演出しているのです。また、この付点４分が、(思い出の中の)広がる大空、広大な大地のイメージを作っているのだと感じられます。

さらに、ここまで読んでいただいた皆さんなら、お気づきでしょうか？

♪ソドレミ(移動ド)で始まるメロディーは、世界でもっとも多く登場すると言われているモチーフ頭の音使いですね(P.39)。

なかなか、ここまで理論的にも完全でありながら、郷愁や感動に直結するメロディーは、天賦の才がなければ書けないと思います。

(★2) 先述しましたアクセントを強調するメロディーです。６度の下行は、印象に残りやすいです。「かとんぼ」の部分は、あまり動きがありませんね。前のモチーフのダイナミックさをクールダウンさせる意味合いです。また、しみじみとテーマである赤蜻蛉を歌ってほしいという意図も感じます。

(★3) ここでも完全４度の上行が登場です。Aの１小節目とBの１小節目は、リズム形が同じですし、厳密にではありませんが、平行に上がっているメロディーです。統一感ですね。

(★4) ここからの下行のメロディーは、美しいのひと言です。どんな童謡の、どのメロディーに比べても、最高に美しいと思えるほど、美しいラインが描かれています(著者の実感です)。この２小節のための、3/4 拍子にしたのではないかと思うほど、言葉とメロディーが絡み合い、メリスマ(みたのぉはぁ～)で感情をあおりながら、最後の主音である♪ミ♭音に向います。

……歌詞がさまざまな手法で感動を伝えているのと同様に、メロディーも１音１音に心を込めて、歌詞の感動を伝えるような思いやりの心が感じられる作りになっています。著者的に、感情過多になってしまうほど、素晴らしい歌詞とメロディーのコラボレーションです。